

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 10 月 27 日

所属部局・職	霊長類研究所生態保全分野・修士課程学生
氏名	有賀 菜津美

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
愛知県犬山市 日本モンキーセンター	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
動物園・博物館実習	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 26 年 10 月 6 日 ~ 平成 26 年 10 月 9 日 (4 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
日本モンキーセンター	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p>	
<p>動物園としては日本で唯一の登録博物館である日本モンキーセンターでおこなった、4 日間の実習について報告する。</p> <p>実習の初日は、伊谷さんから日本の霊長類学と日本モンキーセンターの歴史についてのレクチャーをうけた。ビジターセンター前にあるモニュメントにもあるように、1956 年に財団法人ニホンモンキーセンターとして設立されてから 56 年がたち、その長い歴史の中で、アフリカやアマゾンへ霊長類の研究者を送りだしていたことや、遊園地の併設そして公益財団法人日本モンキーセンターに至るまでの経緯を知ることができた。日本モンキーセンターは、霊長類学の発展に大きく寄与し、霊長類学を社会に発信してきたことがわかった。</p> <p>午後の園内見学では、綿貫さんのガイドで園内を回ることができた。これまで入ったことのなかった KIDS ZOO も見学することができた。なぜ霊長類の動物園に爬虫類やウサギの触れ合いコーナーがあるのだろうと疑問にも思っていたが、モンキーセンターを訪れる子どもたちにとってレクリエーションとして人気が高いことも十分理解できた。飼育スタッフの方は知識も豊富で、教育という面でも効果が高いと感じた。</p> <p>2 日目は、ゴリラとマンドリルの屋内展示場の清掃をおこなった。今まで動物園の方と接する機会が多く仕事内容は理解しているつもりだったが、実際に手を動かして体験することは初めてだった。想像以上の重労働に驚いたとともに、改めて飼育スタッフの仕事について理解できた。衛生面を考えると屋内展示場内はデッキブラシで全面こすりをし、水で流すことが必要であり、この状況でできる環境エンリッチメントはなんだろうと考えることもできた。また、展示場内にあるエンリッチメントのために設置したホースは、毎回清掃の際に取り外して洗い流すことも難しく、飼育員さんが衛生面を気にする理由も理解できた。</p> <p>その後、獣医室でおこなっていたニホンザルの解剖を見学した。これまでチンパンジーの健康診断に立ち会ったことはあったが、このように標本として残すために解剖をおこなっている現場を見学するのは初めてだった。博物館として標本を残していくことの大切さは頭では理解していたが、見学することで身をもって感じるすることができた。木村さんによる解説しながらの解剖作業は、とても勉強に平成 26 年 5 月 15 日 後 1 時 30 分 新 井 出 さん report@shibubio.ac.jp</p>	

スケジュール

- 10 月 6 日 (月)
レクチャー (伊谷さん)
園内見学 (綿貫さん)
- 10 月 7 日 (火)
飼育実習 (坂口さん)
解剖見学 (木村さん)
標本実習 (新宅さん)
- 10 月 8 日 (水)
レクチャー (高野さん、
新宅さん、大橋さん)
エンリッチメントワーク
ショップ (綿貫さん)
- 10 月 9 日 (木)
学校団体へのレクチャー見
学 (赤見さん)
小学生質問対応 (赤見さん)

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

おこなった。博物館登録をしているからだろうか、バックヤードにある標本収容庫には数多くの骨格標本や剥製などが保管してあり、他の動物園にはない一面だと感じた。今回は、すでに骨になった標本を骨ごとに分類して箱に詰めるという作業を行った。これまで骨を一本一本手に取って観察することがなかったので、とても貴重な体験であった。割れてしまっている骨やどの骨か識別が難しい骨も多く、難しい作業だった。しかし、飼育履歴が残っている骨はとても貴重であり、研究者にとってとても大切なのだそうだ。また、貴重な動物を飼育している動物園が行っている、標本作製・保存は、とても重要な役割だと思っただ。その後、内臓などのホルマリン標本をプラスチック製のビンから袋へ移す作業を体験した。筒状のビンなどで保管するのが通常だが、標本の保管スペースをあまりとれない動物園だからこその工夫だそうだ。これまで私は標本に触れることがなかったのだが、今回の実習で手を動かして体験することができ、標本作成は手間がかかるけれども標本の保管がいかに重要かを知ることができた。

3日目は、午前中に高野さん、新宅さん、大橋さんからそれぞれレクチャーを受けた。少人数であったため質問もしやすかった。私は、動物園での環境教育に興味があるが、これまで動物園でおこなうプログラムばかりに目を向けていた。しかし、今回のレクチャーによって、プログラムを実施する以前に学校との連携がスムーズにおこなわれていなければ、学校団体を対象とした教育プログラムを実施できないのだということを知った。また博物館としての資料の収集と保存についても、知識を深めることができた。さらに、フィールドワークの話は、自分がアフリカのフィールドへ行ったあとだったので、今まで以上に共感した。午後は、綿貫さんによるエンリッチメント実習だった。約30分のレクチャーを受けた後、竹と木の枝(アラカシ、キンモクセイ)を使ったエンリッチメント用具の作成をおこなった。今回は、切った竹筒にイモやリンゴ、ペレットなどを詰めたものを作成し、ブタオザルの展示場に設置した。竹筒のサイズは大小2種類あり、小さい方の竹筒は、時間をかければ中身の食べ物が取れるようで、豚尾ザルは熱心に手を入れて食べていた。しかし、大きい方の竹筒はブタオザルにとっては少々大きかったようで、持ち運びも難しく、途中で取り組むのをやめてしまっていた。時間をかけて食べてほしいと思って難易度をあげすぎてしまったなど反省した。難易度は、動物の種や個体の大きさによって変えるべきであることを、身をもって体感した。またエンリッチメント用具の作成・展示に1時間以上の作業時間がかかった。通常の業務を行うなかで、飼育スタッフがエンリッチメントを行う難しさを理解することができた。

最終日は、小学校の団体を対象とした学習プログラムを見学した。まず、小学校2年生を対象に行っていたクモザルスポットガイドを見学した。柵もガラスもない状態で動物を見ながらガイドをするというのは、とても適しているようで子どもたちは興奮しながら聞いている様子がよくわかった。その後、小学1年生を対象とした赤見さんのレクチャーの手伝いをした。レクチャーの最後にクラスから4名ずつ計16名の小学生が質問した。事前に質問内容が分かっていたため、実習生も分担をして答えることになった。私が担当したのは「サルはわがままを言うのか」「サルに友達はあるのか」「サルはうんちをしたあとどうするのですか(ふく?流す?)」という3つの質問だった。小学生の質問のおもしろさに感心すると同時に、小学1年生向けに答えることの難しさを体感した。

4日間を通してとても充実した実習を受けることができた。頭では理解していたことも、自分の手を動かして作業することで、また違った視点からも考えられるようになった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真 1-2 左：KIDS ZOO、爬虫類の触れ合いコーナー 右：ゴリラの屋内展示場の掃除を体験



写真 3-4 左：解剖した直後にすべて重さなどを量って保管 右：袋状の標本にする作業



写真 5 子どもたちからの質問対応準備

6. その他 (特記事項など)

今回の実習を行うにあたり、4日間の素晴らしいプログラムを組んでいただいた日本モンキーセンターのスタッフの方々には感謝するとともに、深く御礼申し上げます。本活動は、PWSより助成を得て、おこないました。ありがとうございました。